

三河アララギ

平成三十年 2018年

八月号

第六十五卷 第八号



ニューヨーク日記(142) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Blue Shoe Diaries



アルゼンチンの肉を食べる時はチミチューリかサルサクリオージャがなくては始まらない。今日はアルゼンチンマートでお肉を買ってきて家で焼いてみました。家で食べるサルサクリオージャには一滴お醤油が入るのよね。うま〜い！

To call any grilled meat Argentinian, you have to have the right condiment. Either some chimichurri or salsa criolla. Today, we went shopping at La Estancia Argentina and got some delicious meat to grill ourselves. Condiment, salsa criolla with a few drops of soy sauce. mmmm~

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

とどまらむときなきわれとわがつまと沿ひゆく朝の志賀のなぎさを

うみの上そらわたる日のかぎろひに夏ひらけゆく大宮どころ

北白川激ちの水のにごりつつ道造る下に虎杖いたどりあたらし

片蔭に著莪ののこりの咲くあたりゆきとどまりつつ山中を越ゆ

志賀越えのころほそみちたどりゆかず思ひはいそぐ病める子のうへ

夏草のおどろに照る日しづかにて病む子の家にわが横たはる

いでましの手火の光りに照りたりし本草のしじに夏しげりたる

高圓をこえて田原は春の芽を収めしあとの茶山清らに

千年をこえてうつろはぬ言葉あり植田をはしる水の音あり

天皇と奉稱となふるよりもとこわかの皇子みことしたしき小さき御陵

三河アララギ歌集VI

大須賀寿恵

笹の間を漂ひながらうつりゆく綿虫をつひに見失ひたり

青き尾の鋭く光るかなへびはリラより落ちてリラにかくりぬ

うろこ雲夕焼色に染まりつつ何もなかりしけふの暮れゆく

かすかなる音して上げ潮のぼりゆく波には白き水泡をのせて

ヘヤーブラシにつきくる抜毛白多いよいよわれに秋深むかな

敷きのべたる蒲団に入りぬけふもまたわが手に漸く干しし蒲団に

黄葉してまるまりながら落ち続きリラはけさより冬木となりぬ

浄願寺墓地をよぎれる径細しわが為に月の照るがごとしも

起き出でて雨かと見上ぐる東の空に眉月鋭く光りてをりぬ

おのづから泪あふれてゐたりけり刺すごとく痛むわが足腰に

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

白沙に生ひたるままのハカランダそよぎ幼し夕ぐれの風

ひとり生えの青軸の梅青き實のつぶらに成りて重るるひと枝

お天氣のよろしき今日といふこゑに忘れてゐたるわが誕生日

深山なしてさやさや小竹^{ささ}の葉はびこれり異常乾燥の日のつづきつつ

開け放つ窓はアカンサスの花の窓診療室をあけはなつ窓

庭の奥も石もこみちも埋めつつ皐月の朱き花をば言はず

松の翠立ちそろひたる夕映えのあかるき窓を閉ざさむとする

中庭を越えて瓦の屋根の上枇杷の實日々*に*いろづきてゆく

世に疎く過ごしてゐるを思ふ朝矮鶏の卵のいくつをもらふ

車椅子の人に折りとるダチュラの花今年の花の今宵は咲かむ

三河アララギ歌集VI

河原静誠

中興上人の花筒の中より這ひ出でて両手をつきをり青雨蛙

日に三度省みよとぞ教はりぬ鏡に映る吾は円頭

泰山木の眞白き花の今ひらく白色白光とわれは誦したり

山を拓き農道すらも舗装して水の不足をかこちあひをり

鷺草は野に咲きゆくを好とするあるがままにと読む歎異鈔

紫陽花の花の色日毎に変わるらし煩惱具足と独りつぶやく

ケロリ風一つ唸れる御津の空浄願寺の上の夕焼けの空

柔らかく齒にしみとほるベッコウの大根の味は故郷の味

白き糸やうやく通して縫ひぬ日毎履きたる白足袋の底を

山門に近く洗耳の泉あり吾も人の子たらちねを恋ふ

梅雨の間^{つゆま}

蒲郡 岡本八千代

梅雨の間の淡き^{うす}日ざしの空の下一つのみ咲くま白きムクゲ

ま白にぞま白き木槿^{ムクゲ}の花一つ五弁に光る粒々の梅雨^{つゆ}

半乾きの洗濯物を干さむとす梅雨の間淡き空色の下

淡々と君の遺影^{あはあは}のまなざしにけふの陽の影さして来にけり

けふもまた「留守番お願い」と遺影に言ひわが籠り庵に来てしまひたり

しばらくはわがこもり庵にてわが時間だんだんと侘^{わび}しくなりくる不思議

こもり庵の西窓東の窓開けて忽ち吹きくる梅雨の季風^{とき}

幾日も探しゐたりき大切なわれの二冊の大学ノートを

お呪^{ましな}ひの鉢に紐を結びたればつひにみつかりぬノートの二冊

やうやうに「永劫の時間の」一幅を外さむとするわが心かな

ありし日の鳴海の友より頂きし「往還集」をまたも読み出す

「往還集」は天金にして開く時閉ぢる時にも金色きらら

「和顔施^{わがんせ}」と「言辞施^{げんじせ}」といふ仏教語知りたるわれのおごそか心

「和顔施」は優しきほほ笑み「言辞施」は思ひやりある言葉の意味らし

東京の子らより今日は贈り来しつひに私にシルバーカーなる物

御津川に

豊川 弓谷 久子

片假名の花の名覚えきれずをり今朝も咲き初む真赤き花が

か細き蔓に花咲きつぎて真冬を越しぬ二度目の真夏に向き合ふ花よ

離れても親戚並みと言ひながら越し行きし人の訃報が届く

心優しき隣人なりき形見となりし手作り品に思いは深し

隣り合ひて暮せし永き年月を胸に繰りをり深きえにしと

我が庭の紫陽花の花をほめながら今年もじゃが芋くれて行きたり

半袖のパジャマ縫ひ上ぐ為す事のある一日は過ぎゆく早し

落日が窓を赤々染める中湯浴みしてをり夏至の夕べを

子の始めての園芸仕事撫子も矢車草もひよろひよろとして

孫が一人増えし気がしてあゆちゃんの夏服を縫うポシエットを縫う

御津川に鯉を愛する人の数増えしと語る子は姪しげに

頼まれしシャツ直しつつ病もつ甥の体を案じてゐたり

ひっそりとこもりて暮さむ梅雨季と思へぬ炎暑今日も続きぬ

明けやらぬ御津川べりに一人佇つかくも高しかせせらぎの音

色あせし紫陽花の花惜しみつつ剪りつめてゆく六月の尽

上野坂

豊川 内藤 志げ

しばらくを字も書かざるに三河アラギ届けられ夏目先生励ましの便り

孫の式参加は無理とわが決める歩けるだけを子に伴はれ行く

孫の結婚式に参加して死を忘れたり生きる私わたくし

テレビよりの予報の時間は欠かさずに明日の気温に下着を選ぶ

朝より日射もなくあしたて雨降らず花の植ゑ替え茄子の草かき

恒例のランチに行きぬ夫と嫁重ベツトを一段下げくれる

足が無い今年の玉蜀黍はどうします年々われが運びし家に

麻生田の信号右に公園の辻を左に進めばわが家

上野坂急な坂にも壁の陰今日の歩みをまず終りたり

カーナビに探す病院は蔵子なり幾棟となる大きな建物

遠きとて薬はわが家の近く薬局に届けくださる

死の淵より帰りし人は十年も長く生きると認知症の先生

はやぶさ2

横浜 阿部 淑子

梅雨に入り紫陽花の花生氣増す洪水はごめんとてるてる坊主

デイ仲間風船バレーが始まれば勝つ氣満々年齢^{とし}を忘れて

大坂の地震で倒るブロックで短命となる痛まし女兒よ

サッカーのテレビ観戦老夫婦ついたり消したり祈る鼓動よ

はやぶさ2三十二億Kの旅終えて生命の起源解明なるか

檜

東京 今泉 由利

幾日も黒土踏まぬ暮しにて金蛇ひとつ素早くゆきぬ

待つ人を待ちつつゐたりまろまろの櫨若葉のこもれ日のもと

ジャマイカとニューヨークと日本と隔たりゐつつひとつゲームを

地球なる無限の命のそのなかのひとつを守る今朝の目覚よ

果てしなき宇宙を自在にとびまわる五歳の時の思考を今も

一刀に一刀毎に香りたつ檜彫りをり釈迦如来座像

千年をその香失ふことはなし檜正目を彫りすすみゆく

一木に雄花と雌花と球果もち檜の内をうろうろとゐる

蔓性の樹木に由来唐草文釈迦如来座像の光背ですよ

マダガスカル原産蔓性樹木にてのびのびのびるわがベランダに

武者隠し

春日井 清澤 範子

苦しみも福に変わる望して辛きも幸せと思ひつつ暮るる
クラス会出られぬことは淋しかり腰の痛みにぬり薬ぬる
皆様に会ひて語らひ出来ずして案内の手紙何回も読む

菜園の蕪菜は夫の指導にて吾施肥したり芽は盛り上る

武者隠し付くる室には出窓あり梅雨の晴れ間の明るかりけり

出窓より朝日は深く差し込みてさわやかな日なり客待つ今日は

公園の梅の木しつかと実を付けぬ公園の中は緑のシャワー

堤防に添ひて散歩に足運ぶ小鳥の声に癒されぬつつ

梅雨の雨強くなりたる一時をぼろぼろとりズム庇打つ音

入梅の発表あるも真夏日の続く今日は三十一度

青もみじ

豊川 安藤 和代

代をかくトラクターの赤田に映えて早苗さみどり目裏にあり
里芋の畑打つあとを何さがす二羽のカラスがゆるりつきくる
夕せまる水張田早も灯を罅し蛙の声につつまれてゆく

あれこれと出来ない事の多くなり父母言いし言葉かみしむ
すかし百合日毎蕾のふくらめば早起きをしてことばかけをり
才もなく歌を詠みきて五十余年この年もまた向日葵の咲く
夫五年今だ病いは癒えずして握りし砂の冷めたくこぼるる

青もみじ気分がいいと今日の夫プリン三さじをゆっくりと食む
毎年を聞こゆる声よ牛蛙心待つ窓水無月の雨

青田風父のあとゆく自転車幼の髪のリボンひらひら

古茶

東京 森岡陽子

今日の日は青春の頃に戻りをり話しの合う人側に嬉しい

残り葉の古茶あふる程注ぎ横に新茶の真ん丸缶置く

青銅の菩提所の門嚴重に鎖されてをり徳川家眠る

雨足の強くに流るる目黒川姿の見えぬ昨日の鴨二羽

奥庭に凜と紫花菖蒲風情生れし古刹の苔道

あふる程紫陽花咲くは鎌倉の切通しの道今は賑やか

梅雨入りて服装迷ふかバスの中半袖長袖コートとバラバラ

大輪の泰山木の白い花都心のビルの屋上に咲く

重なれる葉の間に隠る梅の実は太りて落つるポロリポロリ

溶岩のごつごつ階段浅間神社富士山信仰今日の富士見ゆ

引馬野安礼の埼

豊川 白井 信昭

朝早く養魚場から角まがるディーゼルの音裏道に響く

右肘ひじの腱鞘炎けんしやうえんのうずきつつ入梅思つゆいりはすしとしとの雨

花壇にてキヌサヤエンドウ蔓あがり稔りしいくつ摘みとりにけり

額紫陽花銀木犀はコンテナに一年をへて芽吹ききたりぬ

ブロック塀倒壊現場の報道に町中の死角いたるところに

額紫陽花芽吹きさみどり二十センチ蕾は数多あまた固く締まれる

み社に茂吉の書になる碑文あり根府川の石に引馬野安礼の埼

二基めなる万葉仮名に二首詠める引馬野の歌安礼乃埼の歌

み社に新たに建ちし万葉碑しみじみ想う磯夫と茂吉

古里の今に伝えるみ社の史跡四基に引馬野伝承地

半端ない

大阪 伊藤 忠 男

安全な乗り物神話崩れゆく密室殺人逃げ惑う人

熊本に山陰千葉と大阪も半端なきかな地震列島

梅雨明けと云われ目をやるカレンダーページ今なほ水無月のまま

後ろにも目あり前でトラップしそのままシート半端なきかな

あれもいやこも馴染めぬ君は首今やこの国駄々つ子なりや

梅雨だとして不快指数は半端なし猛暑の続く水無月半ば

浮かぶ雲流れる水に吹く風も行先知らずただ身を任す

五月晴れ響く言葉の心地よさ暑さに耐える今年なりとて

萌木色染まるお湯とて朝日には敵わないなり爽やかさでは

目の前で咳き込む人のいたとても逃げ場無きなり通勤電車

夏至の宵

蒲郡 杉浦恵美子

バス停に立てば亡夫の山仲間両手に抱へし山菜見せぬ

亡き夫をこんなに慕ふ仲間あり我が知らぬ夫未だ生きてる

山仲間野外の天麩羅我が為に山ウド落の葉タラの芽ヨモギ

魚屋のちよつと大きい桜鯛塩焼にせむ今宵来客

蒲郡は海の街なり来客は山の人にて魚の御馳走

一旦は通り過ぎしが引き返す棕櫚の箒の職人の店

ひとつひとつ使ひ勝手を試しみるミニ箒なれどすべて手作り

夏至の宵ひとりなれども傍らに夫居る心地殊更つよし

もしかして在りしときより多いかも応へなければ夫との会話

鳶の声我が師の屋敷の松の上我が訪ふ度に必ず聞こゆ

田植ゑ

豊川 山口千恵子

一面に淡きみどりの田の続くはや終りたり佐脇の田植ゑ

列なせる植田のみどり色増せり田毎にそれぞれ異なる濃淡

鮮やかにクジャクサボテン赤き色一つの蒼今朝落ちてゐる

杖つきて田の道ウォーキングする友と立ち話する麦秋の原

広々と刈取り真近の小麦畑夕映え明るき麦秋の原

麦秋の麦畑沿ひに歩みゆく声透りゐるヒバリのさへづり

掘りたての馬鈴薯袋に小分けして娘に持たせたり心足らへり

フラウンに小さき蒼見えはじめ根本の苔に水含ませる

昨夜よりの激しき雨の夜半止みてかしましきかな蛙の鳴き声

鳴き交はす二羽の鳥の今朝もをり憎しみ持ちつつ電柱見上ぐ

思ひ浮かぶままに

豊川 夏目勝弘

庭草も庭木も背戸の桧原まで緑の色の深くななりきぬ

ものなべて円形なえるが真なりと今直角に街角を曲がる

ネムノキはいまだ両葉もろはをかたく閉ず今日は新聞の休刊の日

雨となる匂ひを運ぶ東風眠れるネムの両葉の揺れず

たちまちに一週間の過ぎにけり細き緑の条なす田の面

週に一度飲み屋に向ふ電車のなか本を読むは老人ひとり

一週間己れは何をしてゐしや年金残高あと僅ずか

老人の憩ひの広場より木の玉を打ちゐる音の半日つづく

老人の会に入れの誘ひあり百歳になったら入ると答ふ

本読むもテレビを見るのも疲れたり雲の動きを無心に見つむ

歌集「夢のつづき」

水上 信子

歌麿も北斎もよし江戸美人柳腰にて居並びにけり

枕辺にかすかに響くは雷鳴か降り続く雨明日は止むらし

江戸切子薩摩切子を並べおき生まれ育ちの違い楽しむ

真夏日は青き切子に冷酒注ぎ暑さ忘るるひと時を過ぐ

海岸線地形なぞりて道を行く潮のうねりの山谷見つつ

たつぷりと太平洋を眺めたり襟裳岬のその先に立ち

ガラス張りのビルの高みより眺むれば人も車も玩具めきたり

紫陽花の色さえざえと咲き競う小雨の中の青のいろいろ

名乗ることなく和気藹々のバスの中二泊三日の旅の道連れ

鹿一頭うづくまる森ほの暗し鹿舎へ帰る時すぎたれば

『いっよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

地下を這ひ絶えることなき雑草を今日も又こぐ格闘すること

ただ一人鶯の声聞きながら農作業するわれも幸せか

牧原規恵

「母の日」に貰ひしブルーのパラソルを五月の風がそと揺らしつつ
わが顔を画用紙いっばい描きくれるピカソの如き五歳の画伯ね

稲吉友江

懐かしき人らに出会へしこの花展従姉の生けしバイモユリの前
摘みて来しベゴニアの花二枝をあなた迎ふるテーブルのコップに

鈴木美耶子

砂浜にはじゃぐ幼の声高く青空の下の今日の我らよ

かの時のブルーハイビスカス幾花も咲きそめし日々はやも十日か

吉見幸子

君好みし福島の味噌の封を切る「八百匁」の糰のにほふ

連休の最終日なる昼下がり隣に停まるは北九州の車

牧原正枝

雨の中餌を探すか親燕地面すれすれ行きつ戻りつ

見上げたる今日の青空に鯉のぼり二匹のうろこ光りつつ舞ふ

石田 文子

日間賀への連絡船は跳ぶやうにセルリアンブルーの海を奔^{はし}りぬ
奉納の野間大坊にての絵馬なれば弘法大師のご利益あれかし

森 厚子

法輪寺に十三参りの振袖の孫の横顔おとなびてみゆ

渡月橋を振り返らずに渡り終へ十三参りの孫のほほ笑み

山崎 俊子

鮫小紋のやうな絵柄の描かれし折りたたみの杖けふは買ひたり

茶房にて偶然会ひし友達に折りたたみの杖伸ばして見せたり

三田 美奈子

手を伸ばしふれなむとせばすり抜ける息子の飼ひし野良猫アルは
ゴーと鳴る地鳴に戦く震度四「忘れじの碑」よりはや七十余年か

水野 絹子

現代学生百人一首

東洋大学

何故違う遺伝子上は数%金ピカの君錆びついた僕

北海道函館中部高等学校二年

齋藤幹晃さいとう みき てる

姉が来て嬉しそうに見せた物世界に一つの内定通知

青森県立八戸工業高等学校一年

細谷地郁哉ほそやち ふみ や

月釣れたまさかと思う十五夜に本当に釣れた銀色の鯖

青森県立八戸工業高等学校二年

川村俊太かわむら しゅん た

「おっはー」と台本無しの人生を笑顔で歩む僕を演じる

岩手県立盛岡第二高等学校二年

林陽帆はやし あき ほ

残業の光に向ける指鉄砲撃つは未来の自分の姿か

東北大学大学院一年（宮城県）

塚^{つか}田^だ悠^{ゆう}太^た

決まったよ喜ぶ私と温度差が寂しさが増す母のほほえみ

山形県立酒田光陵高等学校三年

田^た中^{なか}日^ひ菜^な

ああ、これが表面張力というものか私の中の苦しみコップ

福島県立会津高等学校二年

秀^{ひで}島^{しま}由^ゆ里^り子^こ

机並べ詠まれる歌に耳澄ます千年前とつながるひととき

茨城中学校一年

伊^い藤^{とう}成^{なる}美^み

贈呈誌

森岡陽子

青森アララギ 第四百五号

- 鳥居ぬけ狐の足跡真直ぐつく伏見稲荷お告げの使者か
- 理想的な血糖管理と誉められて大股になり室を出でたり
- 帰り道隠れ氷に足とられ切れ目の青空仰向けに見ゆ
- 大きな窓小き窓より光長く黄ばみし畳にひとり陽を浴ぶ

鈴木隆之
木下友蔵
藤田礼造
宮川雅子

秋楡 第99号

- 乾きたる空気吸い込む朝の風花粉症を忘れていたり
- 風なきに柿葉一まい揺れているいちまいが庭をこの世となして
- まどろみを突如襲いし鶯の声聞こえる舌足らずして
- 旅立ちと決めて今から抜け出そう自分に生きる残り幾年

高木啓子
杉山千里
不破明子
伊藤妙子

終 六月号 北陸アララギ会

○ 日野山に残れる雪の日々細り花待つ声のあかるく聞こゆ
○ くきやかに筑波嶺の見ゆ防人の見返り見返り歩みゆきけむ
○ 車窓に迫る山畑は原野にかへりつつ続くなだりの暗き杉群
○ 雪解けの水にぬかるむトンネルを進むに水滴首すじに落つ

石 動 玲 子
三 谷 和 夫
高 橋 亜 子
澤 田 信 子

鹿兒島アララギ 6月号

○ ふつくらと真紅に実るグミの実を鴨はいよいよ狙ひ始めぬ
○ 火山灰のこびり付きたる竿を拭き帰省間近の子の布団干す
○ 石段に柿の若葉の影を置く夏めく日差しとなりて来たりぬ

郡 山 禮 子
市 来 房 枝
奥 悠 子

山　　よ

高　橋　育　郎　作詞

一　朝に夕べに　見る山は

ふるさとの山　ありがたし

聳える頂き　仰ぎ見る

我が人生の　道しるべ

二　いつか登ろう　あの山に

幼きころから　夢にみて

いま憧れの　頂きを

ついに極める　ああ青春

三 山があるから 登るんだ

行く手を阻む 険しさを

力の限り 挑み行く

汗が光るぞ 風さやか

四 遥か遠くに のぞむ山

我がこしかたと 共にある

かわらぬ姿 とこしえに

愛する山よ とこしえに

『俳句』

石庭を浄土と成せる沙羅の花

田 中 清 秀

梅雨晴や大空を指す飾り千木

雨傘をさして潜るや大茅の輪

片影を選びて歩む駅の道

浜 田 紀 政

どくだみやお世話になった子供時代

作法聞き左右をくぐる茅の輪かな

走り梅雨庭師仕舞ひのままならず

松 本 周 二

梅雨籠り故郷に友と山河あり

十楽を祖母の花とは思ひけり

草茂る虫喰ひの葉も日々増えて

重野善恵

バケツの中一際美し花菖蒲

梅の実の厨に芳香充滿す

天に地に紫淡く花棟

今泉由利

白く咲き赤き実となる鬼灯市

橘の花を手向けてお母さん

万緑の前山借りて茶を飲めり

柳田皓一

庭若葉脚立の庭師現るる

日本海出雲の朝の蜆汁

配られし祝詞を唱和夏祓

山 迫 京 子

神宮に続き茅の輪を潜りけり
粉吹きて皮脱ぎかけて今年竹

唾蟬に日向の匂ひして孤独

山 元 正 規

香り立つ瑞穂の国や青田風

ひのもとは水と木の国梅雨滂沱

形代に息かけ流す龍神池

森 岡 陽 子

父の所作真似て担ぐや祭足袋

風涼し多摩川澄みて野禽の餌

大広野千の茅花のそよぎをり

植村公女

雨足の太くなりゆき立葵

墨色の定まらぬ日や濃紫陽花

玫瑰や会津藩士の末裔と

今泉如雲

自画像の鐵五郎かな山背吹く

白南風や津輕に能登屋越前屋

岩走る尾の紺碧の蜥蜴かな

杉浦弘

稲の花五風十雨の賜ひもの

受粉終へ閉ぢたる稲の花静か

かさね吟行会

「多摩川台公園」 六月

田中清秀

古墳は土を高く盛り上げた墳丘を持つ古代豪族の墓である。三世紀後半から七世紀末までのおよそ四百五十年の間に日本の各地に於いて造られ、その数は十六万基余りに上ると言われている。今回のかさね吟行会は多摩川台公園で行われ、ここには国指定の史跡亀甲山古墳と呼ばれる前方後円墳がある。五月に訪れた芝公園の丸山古墳と並んで貴重な都内にある古墳として知られている。

平成三十年六月八日、典型的な梅雨晴れの一日となった。東急線の多摩川駅に集合し、まず、歩いてすぐの多摩川浅間神社に参拝する。この神社は田園調布の氏神であり、八百年前の鎌倉時代に源頼朝の妻正子が夫の武運長久を祈りこの丘に正観世音を祀ったのがおこりとされている。石段を登る立派な境内と社殿、遠くに正子も見たであろう初夏の富士や丹沢山系さらに箱根の山々が眺望できる。当日も、たなびく雲に雪解の富士が微かに頂をのぞかせていた。また、神社の石段の脇には海底から自然に生まれた丸い子宝石や富士の噴火の溶岩が荒々しい岩肌を残したままに置かれている。

万緑や長き歴史の上に立つ
溶岩の無骨なる段夏の富士
高台に涼しき風の晴れ日かな

由利 陽子
皓一

多摩川台公園の自然林には武蔵野の面影をとどめるアカマツ、ケヤキ、ナラが歳月を経て高々と茂っている。幾つかある小道の木下闇をのんびりと自句の構想を練りながら散策する。木洩れ日の中、吹き抜ける僅かな風が頬に心地よい。

野草園は調布浄水場の跡地に造成した近代感覚の公園で、花壇にはスズランやシバザクラなどの野草を中心とした様々な植物が植えられ、詩情あふれる光景が広がる。見頃を迎えるアジサイの花が紫に色づき始めていた。また、水生植物園の池には小さなメダカが元気に泳ぎ、睡蓮の葉が浮かぶ水面には水馬が何匹か足を踏ん張り漂っていた。

陵へ続く小径や濃紫陽花
木洩れ日のスケッチブックに濃紫陽花
水中に色付き初めて羊草

正規 紀政
さち子

公園の最高地が亀甲山古墳跡で、その管理事務所には全国でも珍しい古墳展示室がある。当時の人びとは何を

考えどのような生活をしていたのだろうか、埴輪は何を語っているのか、曲玉は誰を着飾っていたのか、展示されている多くの遺物を見ながら昔の生活を様々に連想する。時空を越えて古代へタイムスリップするのが考古学の魅力でもある。

公園の住宅街よりの敷地には大きな広場が二つあり、犬の散歩や軽い運動、ジョギングを楽しむ人が多い。また、小さな子供の遊ぶ広場には平和を願う母子像が立っている。そして春にはこの広場に植えられている三百本の桜が見事に咲き揃う楽しい市民の憩いの場となっている。

梅雨入りし草の香ほのと古墳跡

万緑や平和宣言母子像

蟻の列笹陰抜けてどこまで

清秀

京子

れい子

多摩川台公園の先は田園調布の住宅地へと繋がる。田園調布はご存じのように渋沢栄一が理想的な「田園都市」として開発した地域で、長嶋茂雄などの著名人が多く住んでいる。緑に囲まれた広い庭、レンガや白壁の洒落た住宅が幾つも続く。イギリスをモデルとしたガーデンシティを造ることを目的とする為、ここの住宅は洋風の建物が多い。

教会の鐘轟けり青葉山

夏木立切れ間にのぞく風見鶏

周二
素山

昼食は瀟洒なレストラン「田園調布倶楽部」で句会を兼ねて行なった。ランチメニューは前菜のジュレとパスタ料理、ケーキとコーヒー。入口はカフェテラス、二階は吹き抜けの綺麗なシャンデリアのテーブル席、そして我々は三階の洋室を貸し切った。白いテーブルクロスと洋食器、いつもと違うお洒落な雰囲気包まれている。そんな中でも句会はいつもの様に囁目三句出し四句選で行われ、変わらぬ厳しい講評と有意義な俳句談義を行い無事お開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 八月十日(金)

場所 飛鳥山博物館

集合 王寺駅J R飛鳥山改札口

十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（七六）

丸山 酔宵子

『居酒屋・自由が丘金田』

気怠さでうとうととして目覚めた初夏の爽やかな夕刻。2週間にわたる横メシ、ワイン、時差ボケで、内臓はもう既に限界。体がさっぱりした日本料理を欲しているが、矢張り頭に浮かぶのは、行きつけの『居酒屋・自由が丘金田』である。『金田』に通って半世紀。戦後自由が丘駅前の屋台から立ち上げ、大卒2代目が東急電鉄のサラリーマンを辞め、居酒屋金田として堂々たる店に育て挙げた。しかし7年前に突然亡くなり、現在は3代目が継いでいる。

夕刻5時過ぎに暖簾をくぐると、特徴ある『ヨ』の字型のカウンターには菌の抜けたようにお客はまばら。ひと昔前はオープン即満席状態であったが、昔の常連客は高齢化で、世代交代が残念ながらうまく進んでいないよ

うだ。『金田』の素晴らしさは、昔と変わらない味と雰囲気であり、その律義さは半端ではない。酒は「菊正宗」、醬油は「ヤマサ」、食材は「国分」と創業時から変わっていない。

2代目が健在の頃、いつものように6時過ぎに行ってみると、カウンターにダークスーツのビジネスマンが3人着席鎮座している。「今日は何かあるんですか?」と尋ねると、「ええ、金田の一階カウンター席は予約が効かないので、弊社の社長の代わりに席を取って待っているのです」と、国分のエリート社員が答える。今夜は、3社長が集まり金田での久々の懇親会とのこと。2階、3階はテーブル席や座席があるが「居酒屋金田」は2代目の大将と奥さんが切り盛りするカウンターなのである。

山口瞳や伊丹十三たちもカウンターの常連で旨そうに酒を飲んでいた。パンチの効いたジャズ歌手の柴田はいつも常連で、カウンターで美味しそうに菊正を常温カッブ酒で吞んでいた。最近では、奥さんから聞いた話だが、

5時開店直に沢田研二が目深に帽子を被って奥さんの田中裕子と度々来られ、美味しそうに菊正を飲んでいたそうだ。

3代目の料理を任されているのが、2代目の次男で京都吉兆に修行に行っていた。因みに私見であるが、居酒屋料理の原点は、酒を美味しく飲むための「アテ」の文化であって、坂本龍馬や高杉晋作など幕末の志士たちが愛したように、美味しく酒を飲むためのつまみであったのではないかと勝手に思っている。

「えーと。サッポロ大瓶（赤ラベル）ください。それに、マグロやまかけ。やつ・・鰻（はも）の季節か・・」。

もう一本鰻の皮ある今宵かな

酔宵子

ある自然科学者の手記(72) 大橋 望彦

『マスク』

最近、腎機能不全により、人工透析をする様になってからは、月、水、金曜日は、朝から夕方まで、ほとんどの昼間は病院で過ごすという変則的生活を強いられることとなった。

この透析により低分子の尿毒素等不要物は除かれるが、免疫力も落ちてしまうそうで、どの様なメカニズムでそうなるのか知らないが、多分免疫に必要な蛋白質の素材、アミノ酸類の不足の低分子の結合物質等が透析の際に、除かれてしまうからであろう。そのような理由で、冬になると、殆んど患者・職員全員がマスクを着用している。

このマスクは、どんな小さなウイルスでも通過されない不織布が使われているそうであるが、ウイルスがひっかかる程度の穴というと極めて小さく、呼吸が苦しくな

る程、密であると思うし、穴は小さくて通過出来ずとも、マスク周辺の隙間はいくらもスカスカに呼吸は通ってしまふであろう。でも、大丈夫であるという。それはそれとして、確かにクシャミや咳などの飛沫の跳ぶのは十分予防出来るであろうから、それ丈の意味は理解出来る。

でも、マスクの顔は、美的ではなく、何か犯罪者を連想させる既成概念の様なものがあり、カッコ良くない。それも統一的な顔になってしまふのだから始末が悪い。その様な意味で冬の季節はどうも好かない。冬は、寒さを防ぐのに物を着れば、寒さは何とかなるのでまだ好いと思っていたが、空調も入り、室内温度が何とか保てる世の中となると、暑さ、寒さでなく、人間の身勝手さが表面に出る。反自然主義的生活とでも云うのか、段々自分がそのようになって行くのを感じて、恐ろしく思う。

どこかで大きなクシャミが聞こえたが、あれはマスクをしていない人だな……等と余計な事を考え乍ら。

マスクの歴史はいつ頃からであろうか。小学生時代を思い浮かべると、確か、革で出来た、河童だか烏天狗のようなマスクをしていた様な気がする。戦時中頃だろう

か白い布になり、ガーゼのマスクになった。今の様な不織布の立体型マスクは、数年前より見かけるスタイル。昔は、マスクの使用は主として防寒具か感染症防御のために用いられていたが、昨今は、マスクのスタイルが一種のファッションの性質も加味されるような処も出て来た。また顔をカクスことで犯罪者の簡単に使える変装用の道具ともなっている。マスケラーデ（假面）からマスクという言葉が出てきたのだと思うが、『假面舞踏会』という映画が一時大変流行った時があり、その頃から『マスク』という言葉が一般化したのではあるまいか。マスクは假面であり、顔のことである。鼻、口を防ぎ、人の顔が判別し難くなるとすると、鼻と口の形がほとんどの人の個性を代表しているとも考えられる。以前に東芝の給与を奪った『三億円事件』というのがあったが、その時に公開された姿は、ヘルメットを装着したポリスマンの姿であるが、顔にマスクをしているので、顔写真とも云えず、遂に時効の事件となってしまった。鼻、口が見えないと、顔写真の役に立たない典型的な例となってしまった。マスクの存在感を大にしている。「目が物

を云う」例であるのかも知れない。

おわり

「江上浩二の独り言」 8 江上浩二

吉田長次郎氏とのご縁

年末になると、何故だか寺田寅彦モードに入ってしまう。(平成22年の事)

私が平成18年の秋に北海道札幌へ出かけたときに、北大近くで、偶然立ちどまった古本屋で昭和12年10月に本当に初版で出た寺田寅彦の全集(岩波書店)の第15巻、小説や随筆でなく、書簡集(手紙や葉書をまとめたもの)を積み上げられた古本の層から見つけて購入した。出版後ほぼ69年、没後71年である。昭和12年は寅彦が世を去って2年と経っていない。有志が書簡をかき集めて、他の短編、随筆とあわせて全集にされたようである。恐らく寅彦の長男(北大で勉強された)や弟子に当たると中谷宇吉郎先生(世界的な雪氷学者)の関係者に寄贈されたものが古本屋にでまわったのかと勝手に想像している。

私は吉田長次郎氏を、この寺田寅彦の書簡集を読み漁るうちに知った。寅彦の幾多の随筆には登場してこなかったと思う。その書簡集で手紙魔と思えるくらい寅彦の手紙のやり取りに、僅かに登場する吉田氏である。

なぜ私が長次郎氏に興味を持ったのかは、昭和10年12月、年の瀬が迫った時期に寅彦は60歳に満たず、旅立たれたが、その寅彦の最期の手紙(12月7日付け)が愛媛・松山の吉田氏へ送られたのであった。死を前に代筆までされた手紙の内容は、昭和10年3月8日に(正岡)子規三十年記念号が吉田

氏から寅彦へ贈られ、その返礼・私は病床にいて何も出来ず、宜しくと言った内容が最期の手紙として認められたのである。

ここ数年、その吉田長次郎氏はどのような方だったのだろうかと調べていたが、70余年前のこと、どこにも消息が無かった。寅彦は熊本の高へ進学し、そこで英語教師であった夏目漱石から教えを受けた。東京帝国大学へ進学し、漱石の紹介で正岡子規と知り合う運命となった。さほど俳句が上手くなかった寅彦は、子規の赤ペンを沢山頂いたと色々、書籍に残されている。

その師範を極めようとしていた子規は江戸時代、1763(宝暦13)年生まれ小林一茶の俳諧研究とその評価をしていた。子規の俳句の原点が小林一茶にあるようだ。その仔細には入り込まないが、小林一茶周辺情報を漁っていたら、創刊して間もない俳句研究(改造社)昭和10年7月号に、吉田氏が「一茶さらば笠」という寄稿をされている事が分った。これまでの進捗はただこれだけである。しかし、吉田氏は、子規の俳句の原点であったかも知れない小林一茶に関わる寄稿しているくらいだから、子規の死後30年を経ても子規記念号が発刊され、それを寅彦へ届けている処に、時の長さを感じさせない吉田氏の想いを感じた。

時がしばらく経ち、事態が展開してきた。

平成26年8月末、自宅に突然のお電話頂いた。

あなた様のHPを拝見しました。

「あの一」、失礼ですが、吉田長次郎の娘です。

「へー」と驚く私。

家族でも、寺田寅彦と父親が何か親交があったとは知ってい

ますが、詳しいことは分かりませんでした。父は約40年前に亡くなっています。最近、お孫さんがネットで検索したところ私のHPに書かれていることを見て、ご家族も吃驚したというようなお電話の内容でした。

吉田長次郎氏は寺田寅彦の随筆には無く、没後まとめられた書簡集に何か所かお名前が出てくる程度の氏であると理解していた。

この吉田長次郎氏は今のネット検索でも出てこない諸氏であるが、同人・子規三十年記念号を贈って頂いた礼状を寅彦から出しているの、恐らく子規の関係者・研究者と思われる。くしくも、若いときに病床の子規を漱石とともに見舞った、その子規の関係者へ最後の手紙を出されたことになる。

私も電話先の娘さんへHPに書いた内容も見もせずに、頭の中にずっと焼き付けられていた、あれこれ、云々の理由、背景を話させて頂いた。

ふと考えると、家族が知っている親の世界と家族が知らない親の世界があって、家族が知らない世界が現代の魔法のツール、インターネットのHP、ブログで父親の死後40年を経て知ったという稀有なストーリーになってしまった。

娘さん、西山展子さん（当時81歳）がまとめられた冊子・楽天に詳しく長次郎氏の生き様がまとめられているが、これらは私がこれまで知らなかった一市民、長次郎氏の一生であった。人は生を受けたからには、普通両親の出身地や親の仕事の関係でどこそこに住み始め、そこが人生のスタートとなる。長次郎氏も四国の多度津で命を受け、母親方の出身が松山で、

松山が生活の基盤となったようだ。長次郎氏は東京帝大を卒業し、文学、美術・絵画を得意とし、松山の学校で教師を勤めたそうである。時代も時代、そんな環境で、夏目漱石の教え子の寺田寅彦、若くして没した正岡子規の俳句を通して、人が人を誘い、切磋琢磨していたことが分かる。

残念かな、漱石の俳句、寅彦の俳句はそれほどなかった様だ。吉田長次郎氏は、ホトトギスの会員で、吉田澄子（とうこ）と名乗って俳句など文学活動をしていたそうである。西山様の冊子・楽天には、父親長次郎氏が旧制高校の後に愛媛大となり、愛媛大で教鞭をとっている最中に、西山様も学生として愛媛大に学び、学友の先生が長次郎氏であり、また自分の父親である板挟みの環境にご苦労された事も書かれている。長次郎氏は、退官後は東京に居を移し、暮らして、今から40年ほど前に80歳で旅立たれ、正岡子規の倍以上、50台後半で去った寅彦、49才で去った漱石より充実した人生を送られたに違いないと信じている。娘さんが、きちんと冊子・楽天を残されているからである。

最近話題（平成26年TV番組）の村岡花子も、子・孫が親・祖母を振り返り、親が生きた時代よりも、死して現代に知らせしめた様なもので、私も村岡花子は知らなかった。親が死して、その後、親の才智の及ばない世界で、子が親の生き様をまとめ上げる。そんな境遇には私は決してならないと思うが、長次郎氏の娘さん、西山展子さんはそれを実行している。その努力に敬服したい。晩年の長次郎氏のお写真も頂きました。

合掌

平成22年／27年記す

絹の話 (93)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

野蚕布で日傘を作る

紫外線と生活

昨今報道機関による紫外線の皮膚に及ぼす害が頻繁に語られるようになって、日傘の需要は増えています。日傘の目的は強い紫外線と暑さを防ぎ、アクセサリーとしてのとお洒落です。

人間は夜行性動物から昼間活動動物に進化して来る過程で皮膚にメラニン等を蓄え紫外線に耐える体を作ってきました。

我々黄色人種の中にも紫外線アレルギーなどと云う人がいて、都会では冬でも額にバインダーを深くかぶり、手の甲まで覆っている人を見かけます。

紫外線によく当たった人が必ずしも癌を発症する率わけではないようです。

雪国の人は冬期に紫外線に当たる事が少なく、くる病になったりする事があるようですので、人にとってある程度の紫外線は健康を維持する為に必要なのです。

紫外線防止加工の日傘

市販されている日傘に98%紫外線カットという品物が売られているようですが、紫外線をカットし過ぎるのは反って健康に良くありません。

それらの製品には防紫外線科学薬品が塗染されていて、その微細薬品は不断にはげ落ち、2、3年で効果が失われてしまうばかりか、落下するその微細薬品が脳皮を通過し、頭蓋骨をも通ってしまい、脳に何らかの傷害を起こさせないか心配する研究者もいます。

ただ、その日傘の下に居る時間はごく限られていますので問題にはならないかと思われます。

また、その様な日傘は発売後、長い年数が経過していないので、問題が起きていないのかも知れません。

後年アスベストの様な事が起きなければよいが、と思います。安易に手に入れた「便利」は、その分、人や大地に負荷を負わせていないでしょうか。

野蚕絹の日傘

ヤマユガ科のタサール蚕とムガ蚕の野蚕絹で日傘を作ってみました。

野蚕絹は布面に当たった光の反射、吸収能力が高く、紫外線(A波、B波)避けには効果が高い事が判りました。

太陽光は波長の長い順に赤く黄く紫く無色（紫外線）で構成されており、熱量も高く低になっています。

野蚕絹糸の表面に当たった光の80%前後の光が反射され、波長の短い20%位の光が繊維の中に取り込まれ繊維の中で乱反射し、その内の紫外線領域の10%位の波長が紫外線より少し波長の長い（530nm前後）より害の少ない波長後）に変えられて繊維の外に放出されます。

即ち、ヤマユガ科の野蚕絹は糸の中に吸収された紫外線を瞬時に非紫外線に変えてしまう驚くべき特殊な能力を持っているのです。（生物の進化）

その時ほんの僅かな発熱をしますが、この熱は絹を作るアミノ酸の60%の軟結合の部分と糸の多孔質構造部分に溜められ、日傘の表面が35℃を超えて来ると盛んに放熱を始め、日傘の温度は上昇しないのです。ですから、野蚕絹の日傘は紫外線を防ぐばかりか思いのほか涼しいのです。

一般の日傘を何年も使っていると生地が日焼けして使うのを躊躇しますが、野蚕の日傘は紫外線による生地の日焼けは殆どないばかりか、生地の変色も抑制されて、長持ちします。

また水に濡れても大丈夫です。まさかの時の雨避けに使って下さい。濡れたまままたたんでおくと、そのまま乾

いて生地が縮んで傘の骨をいためるおそれがありますので、乾くまで開いておいて下さい。まんべんなく水に濡れた日傘は乾いても水ジミなどの心配はありません。

野蚕絹の日傘は森林浴気分

野蚕絹の中でも繊維が最も多孔質な黄金色のムガ蚕の日傘が軽きもちがよいと評判です。

健康を害さないよう紫外線カット率を60%前後にして、（健康体の人には丁度良いカット率）なるべく生地を薄くし、より軽く、生地 of 地目から森林浴的木漏れ日があるようにすると、広葉樹林の中でマイナスイオンを吸い込んでいような、さわやかで落ち着いた気分になります。まさにミニ森林浴です。

また、野蚕絹の日傘の生地が当たると、品よく艶やかに輝き、その光の中にいる人も若々しく見えるのです。この姿こそ『綺麗』なのです。

注…綺麗の語源は薄絹をなびかせた女性の近くを鹿の群れが通り過ぎる様子を言ったもの。

綺…上質な絹

麗…鹿の群れ

楽しい時間 69

山本紀久雄

2018年6月30日

明治維新150年・・・その七

前号に続く江藤淳氏『海舟余波』の誤りについて指摘である。それは『一外交官の見た明治維新』の原文“A Diplomat In Japan”には、3月9日江戸派遣時について、“used to visit”と書かれている。“used to”は過去の習慣（よく〇〇したものだ）を表す文法である。つまりここに書かれている「訪問」は、3月9日の派遣時に訪問したという特定の事実ではなく、この時期にサトウがおこなっていた情報収集の方針・やり方一般をいっているのであるが、恐ろしいことに江藤氏は、サトウの原文意味を確認せずに、海舟がサトウと会談したと断定しているのである。

さらに、横浜開港資料館に行けば、イギリス公使のハリー・パークスが本国に報告した文書のコピーが保管されているので、これを読み解けば3月9日にサトウが勝と会っていないことが判明する。だが、横浜開港資料館史料云々との記述もない。

江藤氏といえば、日本を代表する著名な文芸評論家であり、江戸城無血開城に際し敗れた幕府側の人間でありながらも、理想的な治者として勝海舟を見出し、評伝『海舟余波』を著して海舟を世に喧伝した。また、松浦玲氏と共に前記の『勝海舟全集』（講談社）の編纂に参画した。『水川清話』と『海舟語録』は何度も重版されている。

江藤氏は何故に3月9日に拘っているのか。それは海舟が3月13・14日の西郷・勝会談以前の9日に、通訳官アーネス

ト・サトウに会い、パークスへ工作し、パークスから西郷に江戸攻撃を止めるよう圧力をかけたという説にしたいがためであろう。

つまり、

鉄舟が駿府で西郷と談判している時に、海舟が既に江戸無血開城を止めさせるべく、イギリスに協力を得て交渉をしていたことになるわけ、こ

れが事実ならば勝の功績は大きい。だが、この事実はない。

このような歴史研究家の史料読み込み誤りと、解釈違いは恐ろしい。結果として、江戸無血開城は「西郷と勝による慶応4年3月14日の会見で決した」という説が多数説として流布され、史跡が港区田町駅近くの薩摩藩蔵屋敷跡に立ち、加えて、平成15年（2003）に海舟生誕の地に近い隅田川河畔、それも墨田区役所の脇に海舟像が建てられた。

筆者が2016年7月18日に開催された「勝海舟フォーラム」に出席した際、墨田区長は挨拶で「墨田区で3人の世界的偉人が誕生している。葛飾北斎、王貞治、それと勝海舟である」と述べた。北斎と王さんはわかるが、海舟が世界的な評価を受けているとは思えない。海舟の評価が高いのは、後



世の歴史家がつくった虚像によるものではないだろうか。

鉄舟の禅弟子である円朝は、無血開城が鉄舟業績であることが、明治全中期では常識としていたから、何も作品の中で述べていないし、円朝を含む当時の江戸っ子は、150年後、歴史研究関係者間で、江戸無血開城が「誰によつて成されたのか」ということが、これほどまでに議論されていることは予測できなかったであろう。

150年経過し、日本が先進国として世界に冠たる地位を占めているがゆえに、そのスタートである無血開城に、現代人が強い関心を持って、縷々語られ、研究がなされているわけだが、往事の当事者である鉄舟は「君主に臣民が為すべきことを為したまで」という海舟とは真逆の淡泊さである。

この爽やかさを鉄舟はどのように身につけたのであろうか。それは禅修行によつて辿りついた境地に尽きるであろう。また、円朝も鉄舟の姿から学んだからこそ、その境地・奥義を己の生き方に取り入れたに違いない。

では、鉄舟が禅から得た境地とは何か。鉄舟は僧侶ではなく、武士である。だから、鉄舟は武士道の体現者として理解すべきである。

鉄舟は亡くなる前年の明治20年（1887）、門人の前滋賀県知事・籠手田安定らの求めに応じ、何回かにわたつて武士道を講じている。（参照『山岡鉄舟の武士道』勝部貞長編）その講義の冒頭で、『拙者の武士道は、仏教の理より汲んだことである』と述べている。ここでいう仏教とは禅を意味しており、続いて、『それもその教理が真に人間の道を教え尽されているからである。まず、世人が人を教えるに、忠・仁・義・礼・知・信とか、節義・勇武・廉恥とか（中略）、これらの道を実践躬行する人をすなわち、武士道を守る人というのである』と述べ、その当然の結果として『日本の武士道と

いうことは日本人の服膺実践すべき道というわけである』と論定している。

さらに論を進め『その道の淵源を知らんと欲せば、無我の境に入り、真理を理解し開悟せよ。必ずや迷誤の暗雲、直ちに散じて、たちまち天地を明朗ならしめる真理の日月の存するのを見、ここにおいて初めて無我の無我であることを悟るであろう。これを覚悟すれば、恐らく四恩の鴻徳を奉謝することに躊躇しないであろう。これすなわち武士道の発現地である』

大森曹玄氏は臨済宗の禅僧で、直心影流剣術第15代・山田次朗吉の弟子でもあり、鉄舟ゆかりの高歩院の住職を務め、著書に『山岡鉄舟』があり、その中で鉄舟の武士道講話について次のように解説している。

『鉄舟にとつて、『武士道』とは、かつての武士たちが究明し実践したところの、武士社会の倫理でもなければ、またその主従間の道徳でもない。それは時の過去と現在とを問わず、また士農工商の階級差別に関係なく、広く日本人たるものの踏み行なうべき人間の道なのである。同時にそれは、人類全般にも普遍的に妥当する「人間の道」だともいえるのである。こういうのが、鉄舟の武士道の本質である』

『彼も始めは父母の教訓である『忠孝』というものを、一つの徳目として何ぞと究明したことであろう。形の上では剣、心では禅によって、如何、如何と忠孝を究め来たり、究め去つていくうちに、ついにそれらの諸徳目を貫くところの『則』、別な言葉でいえば、『大道』に当面し、その『淵源』に到達したのだとおもう。彼はそこに確乎不動の『自信』を得た』

このように鉄舟は武士道精神にもとづく行動で江戸無血開城を成し遂げた。次号に続く。

漢詩研修 (二十二)

千代田岳精会 平井茂行

芳野懷古

梁川星巖

今來古往事茫茫
春花入滿山白

石馬聲無杯土荒
南朝天子御魂香

今來古往事茫茫

石馬無聲杯土荒

春入櫻花滿山白

南朝天子御魂香

吉野山霞り奥は知らねども

見ゆる限りは桜なりけり

【作者】

梁川星巖（一七八九～一八五八）江戸後期の漢詩人。尊攘派志士。美濃今の岐阜県の生まれ、天保五年から四五年まで江戸に玉池吟社を開き、多数の詩人を輩出した。安政五年、閤老・間部詮勝が幕命により攘夷論者を捕えようとした時、詩二十五首を作り、幕府の政道を難詰した。普通なら安政の大獄で投獄処刑が免れないところだが、その直後の安政五年九月二日、コレラで病死した。

【解説】

春、桜花の季節に芳野の南朝の御陵で昔を追懷しての作。

同題二首中の第一首。芳野三絶の一と称されている。（藤井竹外・河野鉄兜）

【語釈】

「今来古往」＝古から今に至るまで。「茫々」＝ぼんやりとして遠いさま。「石馬」＝墓への参道に立っている狛犬。「坏土」＝ここでは後醍醐天皇の陵墓のこと。

【通釈】

ここ芳野山の塔尾の陵にきてみれば、昔から今に至るまでのことはぼんやりとして夢のようだ、陵の前の狛犬は嘶きもせず、荒れ果てたこの有様はおいたわしい限りである。今は春、桜花の季節になった桜で真っ白。

『おしどり夫婦として生きた漢詩人 梁川星巖と紅蘭』

中屋保之

紅蘭（文化三年（一八〇四）～明治十二年（一八七九））は、星巖が同郷（美濃国安八郡）の江馬細香らと作った文芸結社に入門、十七歳の折りに又従弟の星巖（三三歳）と結ばれる。当時としては珍しい恋愛結婚であったという。ところが間もなく、夫は『留守の間、裁縫をすること、三体詩（主に、中唐から晩唐の詩を七言絶句・七言律・五言律の三体に分けた詩集）の絶句の個所を暗記せよ』と言い残したまま旅立ってしまった。数年後に帰宅した星巖が目にしたのは、絶句のみならず全巻を暗記した紅蘭の姿であった。その後は二人で四年ほど西国を巡り、詩人として成長を遂げてゆく。やがて江戸へ出た星巖と紅蘭は、神田お玉が池に詩塾「玉池吟社」を開き多くの有望詩人たちが集うが、生活は苦しく大声での夫婦喧嘩が絶えない。近くに住んでいた佐久間象山が仲裁に入ったとか、京都に移り住んでからも頼山陽の居宅まで二人の口論が聞こえてきた、あるいは、最愛の人頼山陽と結ばれなかった江馬細香がそんな二人を羨ましがったなどという逸話が残されている。安政五年（一八五八）九月、星巖が流行していたコレラで亡くなってしまふ。七〇歳であった。安政の大獄における捕縛対象者の夫に代り半年ほど獄に繋がるが、その間、情報提供を拒み続けた功績を京都市が褒賞している。

《参考資料 帝塚山学院大学教授福島理子【注】「江戸漢詩選3女流」産経新聞「夫婦の日本史」Wikipedia等》

「倂さ」ゆえの耀き 後醍醐天皇（在位一三二八年～一三三九年）

正応一年（一二八八）に後宇多天皇の第二皇子として誕生、第九六代の天皇となる。皇統継承争いに端を発した南北朝時代については、「太平記」などの物語で有名。文保二年（一三一八）に即位を果たし、自ら後醍醐と諡名（おくりな）した帝は、あらゆる面でかなりの精力家であったようで、生涯で二〇人ほどの女性に四〇人近い子女をもうけたと伝わる。また、儀式典札、学問や和歌にも造詣が深く、宗学（儒学の総称で狭義では朱子学）に傾倒した帝は天皇親政を目指し、二度の失敗にも挫けることなく鎌倉幕府と対峙し、ついには「建武の新政」を成し遂げるが、数々の失政で夢破れて大和国吉野へ逃れ、延元四年八月彼の地で終焉を迎えることになる。

崩御されたときの論言に

「唯生々世々の妄念となるべきは、朝敵をことごとく滅して、四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。（中略）これを思う故に玉骨はたとえ南山の苔に埋ずむる共魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ」

とあり、その御終焉の形を改めず、棺槨を厚くし、御座を正しうして、如意輪寺の御堂のうしろの林の奥に、円丘を高くして葬り奉った。これが塔尾陵で延元陵とも言い、また、北面の陵とも言う（歴代天皇の陵はすべて南向きに葬り奉るのを通規とする）

以来、南北併立であった朝廷が、足利将軍義満以降は北朝を正統とした。時を経て、「大日本史」を源流とする水戸学の尊王思想が、天皇親政を図った後醍醐帝の再評価となり、尊王攘夷論へと変化し明治維新の礎となり、牽いては戦前の皇国史観の根柢のひとつと考えられている《最終的には『大日本史』の記述を根柢に、明治天皇のご裁断で三種の神器を所有していた南朝が正統であると云々＝Wikipediaより抜粋》。

幕府転覆が露見し、隠岐に流される途中に立ち寄り称賛したとされる岡山県真庭市の一本桜（醍醐桜）が、毎春見事に人々の目を楽しませてくれている。

《参考資料 浄土宗如意輪寺 HP Wikipedia ブリタニカ国際大百科事典等》

「歴代天皇御製歌」(九十二)

賈名海屋資料館

「昭和天皇」第二百二十四代・在位一九二六(二十六歳)―一九八九年(八十七歳)

昭和天皇は、大正天皇の第一皇子。大正五年(一九一六年)十六歳、皇太子となられた。大正十年、皇太子として、海軍の巡洋艦にて印度洋、スエズ運河、地中海、ジブラルタル海峡を経てポーツマス港までの六十日間を海上で過ごされた。イギリス、フランス、オランダ、ベルギー、イタリアなど、各国との接触を深められた。

摂政の任につきたまふ(大正十年・二十一歳)

社頭暁

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

旭光照波(大正十一年・二十二歳)

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのほら

関東大震災起る(大正十二年・二十三歳)

新年言志

あらたまの年を迎へていやますは民をあはれむ心なりけり

大正天皇崩御(昭和元年・一九二六年・二十六歳)

広き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

満州事変おこる（昭和六年・一九三一年・三十一歳）

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

国際連盟を脱退（昭和八年・一九三三年・三十三歳）

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

支那事変おこる（昭和十二年・一九三七年・三十七歳）

みゆきふる畑のむぎふにおりたちていそしむ民をおもひこそやれ

沖縄陥落・ポツダム宣言受諾（昭和二十年・一九四五年・四十五歳）

終戦後

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

折にふれて

海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

戦災地視察（昭和二十一年・一九四六年・四十六歳）

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
國をおこすもとるとみてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

皇居内の勤労奉仕者

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

2017年7月21日

咳は辛いですよね

喉痛↓微熱↓鼻水↓咳

という風邪が流行っています

最初 透明の鼻水ですの

風邪じゃないのかな？

なんて思ってしまうが

この風邪 中々感染力が強いんです

特に咳と鼻水がしつこいんです

咳にかんしては

鼻水が喉におりてきてむせるんです

その後 就寝時に出やすくなります

夜中の酷い咳は

2〜3日でおさまることが多いです

その後起床時に強めに出て

だんだん落ち着いてきて

時々出る咳になります

2〜3週間続きます

しつこいですよね

なるべく咳止めで止めず

(眠れない日が続く場合は別ですが)

菌を出して下さい

その時は周りの人たちに感染させないように

マスクを着用してくださいね

2017年8月23日

熱中症とエネルギー

曇り空から一転

いきなりの夏空が戻ってきましたね

気温差で体調を崩すのはもちろんですが

怖いのは 熱中症です

ここ最近

気温がそこまで高くならなかった為

水分量が減っていませんか？

熱中症対策として

水分量は絶対ですが…

朝のカラカラの状態で家事や仕事をして

汗をかいてしまうと

熱中症になりすくなります

ですので起きたら直ぐに水分補給

可能であればエネルギーになる

果物など朝食前に

軽く摂取するとより効果的です

喉が渴いた

吐き気がする

めまいがする

からでは遅いので

気をつけていきましょう

御津磯夫短歌鑑賞 8

「月虹」 鮫島 満

寒^{かん}の夜の月光^{しつこう}皓^{しろ}く満^みつれども頭^{かうべ}を垂^{かた}れて想^{おも}ふ故郷^{ふるさと}は無^なし

『かうしんばら』昭和五十六年

李白の「静夜思」の本歌取りである。

牀前看月光

(牀前月光を見る)

疑是地上霜

(疑ふらくは是れ地上の霜かと)

挙頭望山月

(頭を挙げて山月を望み)

低頭思故郷

(頭を低^ひれて故郷を思ふ)

「ベッドに射し込んでくる月の光を見ていると、これは地上に降った霜ではないかと思われるほどの白い輝きである。そこで、顔を上げて山上の月をはるかに眺めていると、つい静かになつかしい故郷が思い出されてならない」というのがこの詩の内容である。

作者は、起句・承句を上句で「寒の夜の月光皓く満つれども」と詠み、転句・結句で「頭を垂れて想ふ故郷は無し」と詠んでいる。よく読むと、いかにもこの作者らしいひねりがある。上句の「……ども」には、〈李白先生が見たような情景ではあるが、私は李白先生ではないから〉という自己主張のような思いが表れている。また、下句で、漢詩にとって重要な役割をもつ転句を省いた上で、自分は生まれ育った土地に住んでいるのだから先生のようになるかしむ故郷はないと李白との違いを詠んでいる。

こういう意味では本歌取りとはいっても、読者が本歌の意味をよく理解していることを前提にしながら、その本歌を出しに用いて思いを陳べる方法をとっている。この下句には、ついに一生を過ごした生まれ故郷への思いと、人の生き方の一つの形として自分の過ぎ来しがあるのだという思いを読むことができるような気がする。

「氷魚」のことから (211) 岡本八千代

新暦では後二日で夏至。今晚九時からサッカー、ワールドカップ戦がはじまった。見たくても我慢して「氷魚」の稿を書こうとして私の籠り部屋に。

今日の新聞(19日)には昨日の大阪での震度6弱の地震の事が。大変なことが起きて、人心には、誰もが不安にさいなまれている。人間の運命的なものにはどうすることもできないものを感じる。。。

なんだか変な寂びしさのまま子規のことを書かねばならない。子規のことを書こうとするとやはり漱石のことも書きたくなる。

今年5月24日の中日新聞に「独りボツデ淋イヨ」と大文字で書いてあったので、よく読んで見ると、夏目漱石が英国留学中に書いたハガキの中の言葉であった。これは福井市内の古書店で見つかった絵ハガキの中の言葉である。これは、東京大学とともに学び、同時期にドイツに留学していた福井市出身の国文学者・芳賀矢一氏ら二人に宛てたものであった。これは福井県が23日に発表したのだった。福井市には同県立こども歴史文化館があって、その学芸員が芳賀氏に係するハガキなど百九十四点を古書店で見つけたのであった。その中に芳賀氏に宛てたハガキ一通と、同じくドイツ文学者・藤代禎輔氏宛ての絵ハガキ二通が含まれていたのだった。

この二通の絵ハガキは、日本近代文学が専門で、漱石を研

究する中島国彦、早稲田大名誉教授らが筆跡などを鑑定し、漱石の自筆と確認されたものであった。

漱石がロンドンに留学して間もない一九〇〇年(明治33年)11月21日の消印が残っていた。漱石は孤独を感じていたらしく、他に

○「天気ノ悪ニハ開口シタヨ」

○「英語も中々上手ニハナレナイ」

と慣れない生活を吐露していたのだった。

実は今、私の家の玄関にも漱石の紫陽花を描いた絵ハガキが一枚飾ってある。これはコピーしたものであるらしいが、本物といえは絵は本物だ。私にとつては宝物だ。

漱石も絵を描く。子規も絵を描く。子規は絵を描くことが好きだったらしい。

子規は根岸に住むようになって。同じく根岸に住む画家浅井忠は中村不折を子規に紹介した。不折は子規より一年上の江戸京橋生れ、小山正太郎の同舎で学んだ。小山は新潟出身の画家で、絵に託されたMKのサインから「まさたろう」と読んで間違いはないとか。

同舎は初期には本郷の団子坂にあり、青木繁や坂本繁二郎も学んでいたのだった。不折は二十五歳で第二回明治美術展覧会に水彩画を出したり、第五回には「憐れむべし自宅の写生」などの油絵を出品している。また子規は不折を自分の「小日本」の挿絵画家としてデビューさせてこともある。

かくして子規は、画家たちとの交わりの中で、詩・短歌・俳句の傍ら絵も楽しんだ。次号へ

編集室だより【二〇一八年六月】

○七夕だから思い出したこと。

長い間、本拠地としていたブエノスアイレスから、仕事とか何とか…口実にして、アルゼンチン・日本、四万キロのチケットを常時持っていた。

その頃は、放射能のことなど気にすることを知らないで、飛行機の窓にしっかりと寄り、地上一万メートルの世界に浸っていたのだった。窓いっぱいになるほど大きいハレー彗星が、ずつとずつと私の窓についてきてくれたことがあった。こんなこと本当で良いのだろうか！。凄い！

○日本を発ち、しばらくすると横向になつている南十字星が見えはじめる。南十字星は、だんだん向きを立ちあげてきて、真つ直になると南半球の空にいることがわかる。

ブエノスアイレスの自宅に着き、カーテンを開ける、正面にいつもの南十字星が、何事もなかったようにいてくれるのだった。

○多摩川、浅間神社へ吟行。富士山噴火の時の溶岩ごつごつの階段をかけのぼる。木花咲耶姫に会いたい。

天照大御神の孫、天津日高日子番能邇邇芸命は、下界された時、儚い花のように美しい木花咲耶姫に一目惚れ。結婚。一夜で妊娠を疑われ、産室の出入り口を塞ぎ、火を放ち、炎の中で、火照命（海幸彦）、火闌降命、

彦火火出見尊（神武天皇の祖父にあたる）、三神を生む。火をも恐れぬ木花咲耶姫は、富士山に登頂。富士山を鎮火し。富士山を守る女神。安産の神。子育ての神。酒の神。

○今月の吟題、奥の細道（平泉の一節）松尾芭蕉作。

「奥の細道」を追いかける、ということではなかったけれど、折りあるごとに、芭蕉俳句のその場面、場面に出席して行つた。

深川・千住・草加・春日部・日光・今市・那須篠原・黒羽・殺生石・芦野・遊行柳・白河関・勿来・信夫文知擢・医王子・飯坂・武隈の松・仙台・多賀城・塩竈・松島・瑞巖寺・石巻・立石寺・尾花沢・新庄・最上川・羽黒山・月山・酒田・象潟・温海・村上・新潟・平泉・山寺・中尊寺・金色堂・出羽三山・有磯海・二上山・金沢・小松・出雲崎・親不知・福井・永平寺・敦賀・大垣・大垣の井戸・奥の細道むすびの地・大阪御堂筋東本願寺。

○千代田フィルハーモニー管弦楽団・サマーコンサート・シネマ・クラシック。

知らず知らずのうちに、バックグランド・ミュージックを聞きながらいるのだなあ！とあらためて思うこまやかな音楽会。

J・シュトラウス・トリッチ・トラッチ・ポルカ。バッハ・G線上のアリア。リスト・ハンガリー狂詩曲第2番。身も心も常ではない位置にいて、リラククス、リラククス。

野菜・まんだら

(6) 九条葱



- 「葱」はユリ科の植物。
- 中国西部地域が原産地。
- 奈良時代から栽培され、平安前期「続日本後紀」には九条村（現京都市南区九条）で「水葱」の栽培の記録がある。
- 京の主要野菜と延喜式（927年）に栽培方法が記され、東寺付近から東南

の地域にかけ葱の品質の良い事も記されている。

- 弘法大師（空海）が東寺付近で大蛇に追われ、葱畑に逃げ、難をのがれたという。
- 五重の塔の天辺には、「九条葱の花の蕾の葱坊主」の装飾が、天に向いている。
- 学生時代、東寺を訪ねた時、頂度東寺の塔の影に入り、私の諸手に塔の先っぽ「葱坊主」を受けたのでした。



- 冬を耐えた葱は、タンパク質や薬成分、硫化アリルアリシン、イオウ、殺菌、発汗、駆虫、…、血行を良くし、体を温め、肩こりや粘膜の保護作用、ビタミンB1の吸収を促進、風邪の治療にも効果。
- さっと湯がいて酢味噌でいただくのがいちばん好き。美味しい。

森岡・今泉

明治維新百五十年 奉祝献詠募集要項 明治神宮秋の大祭

一、献詠歌 未発表の近詠（一人一首厳守）
用紙 はがきに限り

献詠は楷書にて書き歴史的仮名遣を用いる（小・中・高校生は現代仮名遣）郵便番号・住所・氏名（ふりがなを付す）・電話番号・年齢を明記（小・中・高校生は、校名・学年も記すこと）
九月五日（水）必着

一、締切日 今井恵子・三枝浩樹・蒔田さくら子・松坂弘
（敬称略五十音順）

一、選歌発表 十月二十一日（日）歌会当日 於明治神宮参集殿
賞 一般 特選 一〇名 記念品贈呈
入選 二〇名 記念品贈呈
佳作 一七〇名 記念品贈呈
秀逸作 若干名 記念品贈呈

一、送り先 小・中高生 一五―一八五七渋谷区代々木神園町一―
明治記念総合歌会係 電話〇三―三三九―五五一

一、献詠披露式

1日 時 十月二十一日（日）午前十時

2場 所 明治神宮御神前

一、第百三十七回明治神宮献詠短歌大会

1日 時 十月二十一日（日）午後一時

2場 所 明治神宮参集殿

3歌会内容 入賞歌発表・表彰・選評

【講演】連続短歌講座（近現代歌人の家族詠）第二回

「田谷 鋭―家族詠の世界」 講師 奥村 晃作氏

◎ 会費不要

☆来会者には作品集を贈呈致します。

☆作品集郵送ご希望の方は、切手三百円分同封の上お申込み下さい。

※特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します

主催

明治神宮献詠会
明治記念総合歌会
電話 〇三―三三九―五五一

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ケ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。